

図書館ジャーナル 2017～第三号～

全国大会優勝 おめでとう！ 文芸部！

Q 優勝した時、どう思いましたか。

A 自分たちの短歌を評価してもらえたこと、仲間と共に勝利をつかめたことがとてもうれしかったです。私たちは、一年生で初出場あったため、まさか優勝できるとは思っておらず、驚きも大きなものでした。

Q 短歌をどんなことを意識してつくっていますか。

A 「自分の心が動いたものを自分の言葉で」ということ意識しています。また、どんな言葉が自分の心情に近いのか、と言葉の効果や順序も考えるようにしました。自分の感動したことで読み手が感動してもらえた時が一番嬉しいです。

Q 短歌の大会での採点基準は何ですか。

A 審査員による投票で勝敗が決します。質疑応答で審査員の方々からの質問に応える機会があるので、そこで審査員の心をつかめるか、というのも重要です。



去年は…**漱石生誕 150年**

でした。

夏目漱石特集 夢十夜について調べました。

第三夜

目の見えない子供が登場し、いつのまにか自分がその子供を背負っている。その目の見えない子供とは、自分という肉体と、それに備わっている知性、そして思想というものだと思います。周囲を見るのは自分という肉体でも、それを知るのは、背中に背負った「目の見えない子供」であり、自分と「目の見えない子供」が関連しています。

しかし目の見えない子供が居るがゆえに、自分は次第にそれをうとましく思えてくる。

自分の思想は、遠い昔に俺を殺しただろうと言います。「そうだ、殺したんだ。」と「自分」は納得します。

自分の思想をうとましく思い、それを殺し、自分はそれを繰り返して、今、ここにあるのだ、これからもそうなのだろう、そう思った瞬間、自分の思想は、背負うこともできなくなるほどに重いものになるのだということを示していると思います。

第四夜

白い髯の爺さんの後をつけていく夢のなかで体験する不気味な成り行き。

爺さんはまっすぐ柳の下までやってくると手拭を出し、そこにいた子供等に言います。

「いまに手拭が蛇になるから見ておろう、見ておろう」

笛をびいびい吹きかけながら周囲を何度もめぐるのでありますがなんの変異も起こりません。

爺さんは笛をぴたりと止め、手拭の首をつまんで手持ちの箱に入れ「箱の中で蛇になる。今にみせてやる。今にみせてやる」とつぶやきながら、とうとう河の岸に出ます。

ここで蛇を見せるだろう、と思っているとそうではなく、爺さんはそのままざぶざぶと河の中へ。

「今になる、蛇になる」「深くなる、夜になる」と唄いながらどこまでもまっすぐに進んでいってとうとう水のなかに消えてしまう。

彼こそが蛇だったのだ。